

ペットの家族化はなぜ起きたのか？～山田昌弘先生特別講演レポート

文：尾形聡子



講演する山田昌弘先生

ペットの犬に何着も洋服を買ったり、うちの子といたりする現在。愛犬家同士では犬の名前を使って“〇〇ちゃんのママ、パパ”などと呼び合い、まるで犬を子どものような位置づけとして捉えていることが普通になってきています。このようなペットの家族化が起きたのはどうしてなのでしょう。そして、ペットの家族化はいったい何を意味しているのでしょうか。

今回の特別講演では中央大学文学部教授の山田昌弘先生をお招きし、専門とされる家族社会学の見地より『ペットは家族か？』というテーマについてご講演いただきました。

「『家族ペット』という本を書いたのが今から13年前、文庫になったのは10年前の2007年です。ペットと家族の関係についての研究はそれほど多くは行っていませんので、もしかしたら私が調査したときと最近の事情は多少変わっているかもしれません。このテーマは学生に家族社会学を教えるとき、食いつきがとてもいいものです。それだけ身近で興味を抱くことのできる話題なのだと思います。本日は家族社会学の視点からペットの意味の変化を考えていきたいと思います。」

ペットを家族の一員と考える人々の出現

山田先生が家族社会学の研究をしながらペットに興味を持ったきっかけは、今からさかのぼること30年前だそうです。

「助手をしていたころのことです。“家族とは何であるか？”という家族の定義についての研究をしていました。調査の中で、ある家庭裁判所の調査官の方と話をしていましたら、“ペットに遺産を残したいがどうしたらいいのか？”という相談をしにきた人がいるということでした。15年ほど前に出版された遺言の書き方という本の中に、ペットへの遺産の残し方という章がありますし、今となっては普通のことなのかもしれませんが、それは30年も前のことでした。」

相談に訪れたのは息子夫婦と三世同居をしていた方で、“息子と嫁には私の財産は一銭たりとも残したくない。私にとっての家族は飼っている犬だけだから、私が死んだら遺産をすべてその犬に残したい”という相談内容だったそうです。

「その後の話は聞いていないのでどうなったのかは分かりませんが、なるほど、同居している自分の息子や嫁よりも、ペットの犬を家族だと思って暮らしている人がいるのか、と思ったのです。」

その後、家庭裁判所の裁判官研修で、山田先生が家族の変化についての講演をしたときのことで。

「誰を家族と思うかは最近では人それぞれで、家庭裁判所の調査官から聞いた“ペットだけに遺産を残したい”という話をそこでしました。すると、講演が終わった後にある女性裁判官から、“私が今担当している中に、離婚をするにあたりペットをどちらが養育するか、ということで争っている案件があります”という話を聞きました。家庭裁判所の離婚訴訟では子どもの親権は争われますが、法律上は物とされているペットの所有権についての争いも起きていることを聞いたのです。」

ペットを家族とみなす人々の存在は、遺産や養育権だけでなく、国勢調査においても見られました。

「国勢調査員研修会で家族の変化について話をしたときに、国勢調査員の方から“ペットはどの欄に書けばいいの？家族欄にどうやって書けばいいの？”といった電話相談が2件あったということを知りました。2005年のことで、当時は国勢調査を紙に書いている時代でした。」

単にペットを家族とみなす人がいきなりあらわれたというわけではなく、そこにはペット関連の産業が興隆してきたという背景も存在していたといえます。

「犬の登録頭数を見ればそれほど増加していませんが、ペット関連商品の売り上げは右肩上がりです。今現在は分かりませんが、少なくとも2010年くらいまでは伸び続けていました。つまり、ペットを家族とみなす人が、いろいろなところでお金を使うようになってきたということです。犬の洋服を100着以上そろえている人もいたり、人と犬それぞれのマッサージ店を隣同士で営業しているところもあつたりします。飼い主が足裏マッサージを受けている間に、犬もマッサージを受けられる形態なのですが、どちらかといえば犬の店の方が混んでいるくらいでした。ペットのマッサージ師がいるということは、ペットのマッサージを教えるコースがある学校があるはずで、人の足裏をマッサージしようがペットをマッサージしようが、同じマッサージ師を同じ時間使うわけですから、当然値段も同じです。」

ほかにも、ペットシッターや犬の保育園、病院、老犬ホーム、葬式、お墓などのペット産業が存在しています。

「いわば“ゆりかごから墓場まで”ですね。20年くらい前からでしょうか、焼却炉を備えたトラックで葬式をあげにくる葬式屋さんがいましたし、仏教はすべての生物は成仏できるという教義ですから、ペットのお墓やペットと一緒に入れるお墓の普及に熱心な宗派もあります。一番ビックリしたのは、ペットが成仏できるようにお経をあげてくれる、ペット専用のお坊さんがいるということです。人間が一生の間に必要とするものやサービスの中で、ペット用がないものはもはや無いのではないのでしょうか。」

ペットは家族か？

2016年、山田先生は学生に対して家族の対象となるのはどのような人か、というアンケート調査を行いました。

「可愛がっているペットを家族だと思う人は116人、思わない人は42人という結果でした。また、別のところで生活している祖父母を家族だと思う人は105人、思わない人は54人だったのですが、これを中国人留学生が集計したときに、とても驚いていました。日本では、ペットは家族だけれども祖父母は家族ではないと思う人がかなり多いのです。中国、漢民族は血縁が絶対だからなのですが、日本では、一緒に生活していると情が移って家族のように思

うようになるといった家族観を持つ人が多いです。アンケートでは、結婚後に別の住居で生活している兄弟姉妹を家族と考える人がほとんどでしたが、それは学生であるからであって、遺産相続争いの現場を実際に見ると、もはや家族とは思えないような関係も結構多いのではないかと思うわけです。」

また、アンケートにおいて、最も家族と見なさない対象と一緒にシェアハウスで生活している友人で、家族と思う人が10人、思わない人が147人という結果でした。

「つまり、ペットをリアルな家族以上に家族として扱っている人が増えているがなぜそうなっているのか、その社会的背景を探るのが、私が研究している社会学のひとつの目的であり、さまざまな構造的な変化が人々の行動や意識に影響を与えているということになります。私が専門としている家族社会学の導入では、ペットの家族化と児童虐待の増加を対にしてよく話をしています。」

児童虐待の通報件数は、1990年ごろには1,000件程度だったのが、去年には10万件を超え、実の親による子どもの虐待が増えてきているそうです。

「本来家族ではないはずのペットが家族として可愛がられる一方で、血がつながっている実の子どもを家族と思わずに虐待してしまうという対になる現象があります、というところを導入として、今の家族はどのようになっているのかという話を進めています。ほかの導入として、婚活とおひとりさまがあります。20~30年前までは家族がいて当たり前、普通にしていれば結婚できるのが当たり前だったのが、今やそうではなくなりました。なんとか結婚するために婚活に走る人もいれば、家族がいるのが当たり前でないなら、おひとりさまで生きる道を探そうとする人もいるわけです。これらも対の現象になっています。」

そもそも家族とは何か？

「家族というものを定義するのは難しい問題です。なぜならば、家族という言葉は近代社会になってつくられたもので、前近代社会では家族という言葉は一般的には使われていませんでした。たとえば社会という言葉も同様です。近代社会における家族とは、自分を必要かつ大切にしてくれる存在として認識され、心理的な拠り所である、と理解されています。前近代社会では、自分が肯定され必要とされ、大切にしてくれる存在は、基本的に宗教やコミュニティでした。」

神様は自分を必要かつ大切にしてくれる存在であり、また、生まれた場所で育って死んでいくのがほとんどだった前近代社会では、コミュニティの仲間も自分を必要とし、大切にしてくれる存在だったからです。

「しかし近代社会になると、移動が自由にできるようになってきます。それに伴い宗教的な感覚も薄れてくると、神様がいるから自分は生きていて大丈夫なのだと思える人がだんだん少なくなってきました。つまり、自分が必要で大切な存在であることを実感するためのものを自分で作らなくてはならなくなりました。そのひとつが家族で、もうひとつが職業です。自分は仕事をしているから、社会の中で必要とされているという感覚を得ることができず、自分には家族がいて、家族から自分は必要とされ、自分を大切にしてくれる、という家族が重要な存在になってきたのです。」

たとえばパラドックスのひとつの例として、結婚しない人が増え離婚する人が増えている一方で、一番大切なものは家族だという人は増加していることが挙げられるそうです。これが戦争直後だと家族がいることが当たり前だったため、一番大切なものは自分、お金という人がかなり多くみられたそうです。

「つまり現在は、自分を必要かつ大切にしてくれる存在である家族が当たり前ではなくなっている状況だといえます。」

そして、社会における結婚の制度も変化してきています。

「前近代社会において、原則、結婚は取り決め婚で、イエ制度が存在していました。親族集団や家族が存在しているところに、決められた人と結婚して自動的に家族に包摂されていく、要するに選択の余地がなかったわけです。一方近代社会では、結婚・離婚が自由化、個人化し、家族は自分で作り出して維持するものとなりました。好きな相手と結婚できるチャンスが作られた反面、結婚できないリスク、家族が壊れるリスクも高まっています。

たとえば、今の30歳以下の人の結婚確率は75%といわれているのですが、ここに100人学生がいるとすると、そのうち25人は一度も結婚できないまま高齢を迎えますよ、と学生を脅しています（笑）。そして今結婚する人に対しての離婚確率はおよそ35%くらいと推定されているので、結婚した75人のうち25人は一度は離婚するだろうということです。ですから、結婚して離婚せずに50歳になる人は2人に1人しかいないんだよ、とさらに追い打ちをかけたります（笑）。このことを中高年の方に向けてお話するときには“皆さん結婚されてお子さん2人くらいいらっしゃいますよね、2人のうち1人は結婚して離婚しないかもしれませんが、うち1人は結婚せずにずっと家にとどまっているか、離婚して戻ってくるかのどちらかですよ”と喋っています（笑）。とはいえこれは単なる脅しではなく人口学的事実で、確率的な問題なのです。」

家族は代替不可能なもの

「家族関係の特徴は、代替不可能であるということです。ペットを家族とみなす人々を調査していて一番感じたのがこの点になります。」

ペットは単なる癒しや安らぎが得られる対象というだけではなく、いかに苦勞をしてきたかを語る人も多くいたそうです。

「取り替えがきかないから、かけがえのないものと感じるという脳回路が働いていることが、ペットの家族化の本質です。哲学的に言えば、ペットは“固有名”を持ち、“固有名詞”として存在しています。イヌやネコといった一般名詞ではないということです。

行った調査の中ではこんな話がありました。子どもが犬を欲しがっていて、子どもの情操教育にもいいから犬を買いにショップに行き、たまたまバーゲンになっていた子犬を買いました。すると、1週間もたたないうちに病気になってしまい、獣医に行ったところ、治療費が購入費よりもかかるということが分かりました。これはショップの責任だろうということで店に電話をかけたところ、取り替え期間中のため健康な子犬に取り替えますといわれました。そして、取り替えた病気の犬はどうなるのかと尋ねたところ、こちらで処分しますといわれたそうなんです。」

それを聞いて父親は、取り替えるべきか否か、悩みに悩むのですが・・・

「犬を物だと思って取り替える人もいるでしょうが、彼が私のインタビューを受けたということは、バーゲンで買った金額よりも高い治療費を払って病気を治したというわけなんです。ほかには一人暮らしの女性で、仕事に行く時には犬が粗相しても大丈夫なように部屋中ビニールを敷き詰めていくという人がいました。ケージに入れていかないのですかと尋ねたところ、そんな可哀そうなことはできませんといい、仕事から戻るたびに粗相を片付けなくてはな

らなくて、大変で大変で…とニコニコしながら語るのです。また、生活に余裕がある人だけがペットを飼っているわけではないですから、ペットの食事代を稼ぐために辛い掃除のパートを始めるようになりました、とニコニコ語る人もいたりします。これがペットの家族化で、ペットは固有名を持ったものとして代替不可能なかけがえのない存在である、ということなのです。逆にいえば、ペットの方も人から自分を特別な存在として思ってもらわないと困りますから、ペットも飼い主の識別ができる存在であるということになります。」

家族は Empathy wall、感情の壁により分けられている

「私がアメリカのパークレイ大学でついていました感情社会学の先生が、Empathy wall、感情（共感）の壁という概念を出していろいろ分析しています。それに基づいて考えますと、家族の内側の人に対しては感情移入して、自分を犠牲にしても尽くしたいと思う、その一方で、家族の外側の人に対しては、同情してもいいけれども同情しなくてもいいし、損か得かで考えてもいい、損してまで何かをする必要はない、ということになります。つまり、家族というものが壁になって共感する人としらない人を分けているということです。兄弟姉妹が家族かどうか、この壁でも分けられます。たとえば学生に対してこんなアンケートをとりました。兄弟姉妹が病気になって働けなくなった、その時あなたは自分の家族を犠牲にしてもお金を払いますか？どのくらい払いますか？というものです。それに対して学生は、1回だったら100万円かな、ずっと依存されたら困る、男兄弟だから1円もあげない、といった回答で、自分の子どもの学費を削ってでも、兄弟のためにお金を援助すると書いた人は、少なくともその場にはいませんでした。」

そして、感情の壁という概念から考えるペットの家族化については、次のようなことがいえるそうです。

「ペットが家族化するという事は、自分のペットが幸せになるためには、自分の楽しみを犠牲にしてもお金をかける存在であるとみなす人が出てきたということです。一方で、ペットの家族化について嫌悪感を抱く人も大勢います。昔、家庭科の教科書で、ボクの家族としてペットを入れた図を載せたものが出版されたのですが、それが国会にまで取り上げられ、ペットを家族というのはけしからん！ということになり、結局その図は削除されることになりました。ほかに、家族は血縁で成り立つものだからそれ以外は認められないとか、感情の壁は人間と動物の間に置くべきものだからペットにお金をかけるくらいなら困っている人を助けるべきだ、といった声たくさんあります。この現象はペットに対してだけではなく、たとえば移民に税金を使うのはけしからん！といったように、人はいろいろなところで感情の壁を作っているものなのです。」

社会の変化とペットの家族化

ペットの家族化以前、経済の高度成長期（1955-1973年）は、豊かな家族を作るのに精一杯働くという時代でした。

「高度成長期は、ほとんどの人が結婚でき、ほとんどの男性が正社員として就職できた時代です。お父さんは家族のために働いてお金を稼ぎ、お母さんは家族のために家事や子育てを一生懸命する、子どもは親のために一生懸命勉強して良い学校に行く、という時代でした。自分が必要であり、大切であるということを家族それぞれが実感できた時代だったともいえます。今の80歳代の人々の未婚率は2~3%くらいで、離婚率は10%くらいですから、高度成長期に若者だった人の9割が結婚して離婚せずに一生を送ってきたという状況があります。」

ほとんどの人が結婚して、自分が必要であり大切であると感じられる家族を作れた高度成長期と比べると、現代の家族状況はかなり変わってきています。

「今は、豊かな社会であり、共働きが増えています。長寿化が起こり、結婚難が起こり、カップルの愛情関係が停滞しています。それにより、①自分を必要かつ大切にされるという経験が家族の中で徐々に減ってきている、②結婚しない人や離婚する人が増えることで家族が存在しない人が増えてきています。」

変化は家族の中での喪失体験にも見られます。

「日本には、一緒に暮らしていないと家族という感覚を得にくい状況があります。学生に、今まで一番悲しかったことは何ですか？と尋ねると、一番多いのはペットが死んだときという答えです。今は、同居していたとしても祖父母が亡くなる、それも自宅で亡くなるということは滅多にありませんので、実際に亡くなる現場を見るのはペットぐらいしかなくなってきているというのが、今の若い人たちの現状です。」

ペットの家族化の背景にある現代の家族状況

現代の家族状況で見られる、①自分を必要かつ大切にされるという経験が家族の中で徐々に減ってきているとは、具体的にはどのようなことなのでしょう。

「多くみられるのは子育て後の empty nest（現代の家族において、子育て終了後の夫婦、とくに女性が陥る生きがい喪失感のこと）です。子育ては苦勞といいますが、苦勞していることは自分が必要されているのを実感していることになりまので、子どもからの必要性がだんだん実感できなくなってきています。男性の場合は、自分が学費を稼いでいるといったことで必要とされているのを実感できますが、女性の場合は子どもの成長とともに必要とされている感覚がだんだんと薄れてきます。」

家族状況の変化は独身同居の人にも見られます。

「未婚で親と同居している 30 歳くらいのキャリアウーマンの女性に対してインタビューを行った時のことです。彼女は、お母さんがご飯を作って帰りの遅い私を待っていてくれる、お風呂まで沸かしておいてくれるというのです。それについてあなたはどう思いますか？と聞くと、私は別に外で食事してもいいのに、お母さんが悲しむから家に帰ってきてご飯を食べてあげている、というわけです。社会学的に翻訳すれば、お母さんが家族の中で自分が必要であるということを実感させるために、私は外食せずに家に帰ってお母さんに作らせたご飯を食べてあげているんだ、という認識です。」

山田先生がペット家族を書くときの取材で、当時 50 歳くらいの中小企業の社長にインタビューをしたときには、こんな話を聞いたそうです。

「子どもたちが小さいときには自分が帰宅すると、パパ今日はこんなことがあったんだよ！とすぐさま駆け寄ってきたのですが、高校生にもなると自分の部屋から出てくることもなく、お帰りという声だけ聞こえるようになりました。そのかわり、今は玄関のドアを開けると、愛犬が喜んで出迎えに来てくれます。昔は子どもとキャッチボールをしたり遊園地に行ったりするのが楽しみだったのですが、今は愛犬とドッグランに行くのが楽しみになっています。というようなことを彼から聞きました。決して夫婦の仲が悪いわけではないですし、親子の仲も悪いわけではないのですが、自分が必要で大切にされているという感覚を日本人はあまり表現しませんから、ちゃんと表現してくるペットにそれを求めることが多くなりますね。」

そして、共働きの増加も自分を必要かつ大切にされるという経験の減少を導いているといえます。

「日本の夫婦の愛情は役割分担という幻想に支えられていた面があります。夫からすれば、自分が稼いでいるから妻が必要としてくれるし大切にしてくれるに違いない、だから給料をすべて渡すのは夫としての愛情表現になると考えたり、妻からすれば、夫は料理を作ったり洗濯したりと家の中のことは何もできないから私が必要で、お金をもらって大切にされていると考えられてきました。共働きになるとこのような配偶者からの必要性が実感できず、大切にされていない感覚が生まれてきます。日本は欧米に比べると夫婦間での愛情表現が乏しい文化なので、何が夫婦をつなぎとめるものになるのかが難しくなってくるのですが、その感覚を埋めるものにペットが使えるわけです。共働きの夫婦で子どもがいない場合はペットを子どもがわりにする、ペットを飼うことが夫婦の仕事となり夫婦の連帯感が生まれてくる、という状況です。」

ふたつ目の、②家族が存在しない人が増えていることとペットの家族化との関連性は、たとえば一人暮らしの中老年女性のペット依存などとして見られます。

「現代は未婚率も離婚率も上昇し、交際率が減少しています。つまり、自分を必要とし大切にしてくれる家族がいない、もしくは将来いなくなる人が増大してきています。日本では独身の人の7~8割は親と同居していますので、まだそれほど寂しくはないのですが、親が亡くなった後は独りきりになるという独身の人がこれから増えてきます。また日本は単身赴任社会なので、家族が遠方にいるため家族がいることを実感できていない人も増えています。」

実際数字で未婚率を見てみると、2015年の調査での30歳代前半の人の未婚率は男性47.1%女性34.6%であり、50歳になると男性23.4%女性14.0%でした。

「これは2015年の数字ですので、現在の未婚率はこれより数パーセント増えていると思います。また離婚ですが、離婚の数自体は2002年がピークなのですが、結婚の数が減っているので、結婚に対する離婚の割合は3組に1組ぐらいの割合でほとんど変わっていません。セックスレス夫婦の割合もものすごく増加しています。さらに、恋人がいない人が増えています。近年どんどん男女交際率が低下していて、大学生の性体験率も右肩下がりで、ちなみに日本での同棲率は1.8%程度でほとんど増えていません。」

現代の日本は、配偶者もいない、恋人もいない、かつ離婚も増えている、つまり独身者がどんどん増えていっているという状況にあるのです。

「将来の経済がどうなるか、人口がどうなるかといった問題もあるのですが、私はそういう人たちの親密性に 관심이あります。たとえば誰かと楽しいことをシェアしたり話したり、スキンシップやロマンチックな感情といったものがいったいどこへ行くのかということに関心があって現在調査をしているところですが、そのひとつがペットなのです。」

ペットの家族化が意味するものとは

「ペットの家族化の下地にはペットを家族とみなす人々が増えていることがあります。先ほどもいいましたが、少なくとも現代の日本社会においては、そもそも家族がいない人が増えていて、家族の中で自分の必要性や大切さが実感できない人が増えていることが背景にあることは確かだと思います。つまり、ペットを家族とみなすことで自分が必要で大切な存在であることを確認しているといえます。」

これは、現実の家族とバーチャル家族との比較で浮き彫りになってきます。

「現実の家族、配偶者や子ども、親、そして恋人はどうかというと、そこには裏切り、思ったほど大切にしてくれない、面倒、お金がかかる、コストパフォーマンスが悪いといった側面があります。若い人が強くいっているのは面倒だということです。結婚しない相手と付き合うのは、女性は時間の無駄といい、男性はお金の無駄といえます。いきなり結婚したい、恋愛は省きたい、という人が増えているのが若者の現状です。」

そして現実の家族にとって代わるのがバーチャル家族になります。

「バーチャル家族は疑似家族、疑似恋愛と呼ぶもので、ペットはそのひとつにあたると思います。ペットは裏切りませんし、自分がいなくては生きていけないですし、リアルな家族に比べればお金はかかりません。ペットはバーチャル家族として今の日本の中でしっかりとおさまってきているわけです。」

最後にまとめとして、次のようにお話されました。

「1990年代以降、ペットは単なる癒しの道具から家族へと、ペットの意味が変化してきました。バーチャル家族にアイデンティティを求める人の中でペットを選ぶ人は増えるのか、というのが今後の問題になってきていると思います。また、階層的にいうと、犬から猫への移動が起きていると思います。傾向からすれば、犬を飼っている人の方が猫を飼っている人より平均年収は高いという調査結果がでていることから、経済状況の悪化が犬から猫への移動に影響しているかもしれません。」

さらに、レンタルおっさん、メイドカフェ、キャバクラなどのように、自分を大切にしてくれたり必要としてくれたりする状況をテンポラリーに買うことが行われていることから、ペットにおいてもバーチャル家族化が進む可能性があります。それには2つの方向性がある、ひとつは猫カフェです。猫カフェにお気に入りの猫がいて、その猫としばらく遊んで帰るといったお客さんが多いようなのですが、それはレンタルおっさんやメイドカフェなどと似たような感覚なのではないかと思います。もうひとつの方向性は、いわゆるアイボ（AIBO）です。昔アイボができたときはあまり流行りませんでした。最近はさらに精巧になってきて、飼い主を区別して反応するようなものができ始めているということです。獣医さんは隣にメカニックを併設しなくてはならないような時代になるかもしれませんね（笑）。そうはいってもやはり、リアルのペットを家族と思う人は一定数い続けると思います。

ペットが家族化したという一番の大きな証は、人々がペットとの出会いを語ることです。ただ単に買ったというのではなく、目と目が合ったから、この子だと瞬間的に思ったといったように、ペットとの結びつきが必然であるという感覚を持つのか、持たされているのか・・・は分かりませんが、それは恋愛と同じことです。しかしペットのいいところは断られないことですね。恋愛は相手から断られるかもしれませんから。」

講演の後は、日本ペットサミット会長で東京大学獣医外科学教室教授の西村亮平先生の進行による、恒例の質疑応答の時間でした。



多くの質問が寄せられた質疑応答の様子

ー現代になって寄生虫などが減り、人が昔から持っていた免疫機能が手持無沙汰になったことでアレルギーという反応が出てくるようになったのと同じように、自分が必要とされ大切な存在とされることを実感したいのは人が元来備えている精神であり、それが手持無沙汰になってしまう社会であるために、人の代わりとしてペットがそのような部分を埋めていると捉えたのですが。

山田先生：埋めているという表現がいいかどうかはともかくとして、そういうことだと思います。ただし、人と交流してそういうことを感じているというのは社会学的レベルでいえば幻想ですので、埋めているのか、それとも新しい形態に変化しているのか、ということになってくると思います。たとえばバーチャルなものリアルなものとの区別がどれだけつくのか？ということです。人に必要とされているのを幸せに思うのと、ペットに使われていると感じて幸せに思うのと、質的に変わるところがあるのだろうかと常に思っています。

ーペットの家族化と児童虐待の増加は対になっているとのお話でしたが、乳幼児は究極に人を必要とする存在であるのに、なぜそこが関連するのでしょうか。

山田先生：家族の範囲を自分で決めているということは、家族だから愛するのではなく、愛するから家族だということになります。子どもに愛情を感じなければ物として扱っても構わない、というところで関連しているのだと思います。逆にペットを虐待する人もたくさんいますから、ペットだけが可愛がられているわけでもありません。ペットは家族だと思っていたのだけれど嫌いになったから捨ててしまうというのと児童虐待もまた、関連していると思っておりますので、そちらについても今後問題になってくるのではないかと考えています。

ー『家族ペット』の本の中に、潜在的にペットを家族としたい欲求があるのではないか、というような一文があったと思いますが、それについてもう少し詳しくお聞かせください。

山田先生：人間にかわるものとして、疑似家族の中では、ペットは自分だけを大切に必要としてくれるという形で信じやすいという点では一番優れている、というように書いたと思います。先ほどもお話しましたが、個体識別ができ、かつ、自分を個体識別してくれるという意味では人間に一番近いかもしれません。あとは、ペットとの関係性にお金は介在しませんよね。キャバクラとは違い、ペットはお金を要求するようなことはありませんから（笑）。

ーペットの受け入れを推進するためにペットの社会的な重要性を上げていきたいと思っています。しかしペットを家族と認めない人が大勢いるとのお話もありましたように、なかなかそれは上がっていきません。状況を改善していくためになにかアドバイスをいただけませんかでしょうか。

山田先生：それは難しい問題ですね。ただし、ペットを家族と見なしているおかげで幸せ度が増している人が多いですよ、とか、ペットを介在してコミュニティが成り立つといったことを挙げて理解を求めていくことはあるかと思えます。そのようなことを外に発信していくのはいいのですが、本当のところをいえば、ペットを家族と見なしている人はそういう効用を求めて飼っているわけではない、ということになりますので、本音と外への発信は分けたほうがいいのではないかと思います。

ーペットが介在することで離婚を抑えているというデータはありますか。また、結婚する人が減っているのは離婚社会を見ていることが原因となっているのでしょうか。

山田先生：継続的に家族を観察しているわけではないので数量的なことはいえませんが、事例として、ペットがいたから分かれなかったという話は聞いたことがあります。子どもがいると離婚はしにくいですし、子どもの両親として夫婦関係が保たれるということもありますから、ペットがいれば、ペットを共に育てる人としての連帯感が生まれる効果はあると思います。結婚難に関しては、私は経済的理由がほとんどだと思っています。日本では夫が外で働き妻は家事をする、という家族形態が標準だと思われていますから、男性の収入が少なくなって格差が出てくると、確実に結婚する人は減ります。離婚する場合も経済的な理由が多いです。離婚は経済階層的に上層と下層で起きやすく、離婚しても経済的にやっていけるというお金持ちの人が離婚するのは昔からあって、その割合は一定なのですが、バブル崩壊後あたりから増えているのは、離婚したほうがマシだというケースです。ですから、離婚する人たちを見てきているのが結婚しない理由となっているのではないと思います。

ー年代別に見たときのペットの家族観の変遷はどのようになっているのでしょうか。

山田先生：30年前に行った大規模調査では、ペットを家族と思う人の割合はだいたい半々で、女性の方が高く、若い人の方が高い傾向があるという結果になりました。10数年まえの調査でも傾向は変わりませんでした。ペットを家族と思う人の割合は増えていました。

ーAIと家族との今後の関係性はどのようになっていくとお考えでしょうか。

山田先生：AIといいますが、バーチャルなもので感情が満たせるかというのは私の大きなテーマでもあります。2年前に亡くなった社会学者のウルリッヒ・ベック氏の最後のテーマが『Skypeでつながった家族』でした。一緒に暮らすとか、直接コミュニケーションをとるということを一切せずに、Skypeだけでつながっているような家族です。Skypeの裏が本物ではなく映像だったらどうなのでしょう、か、とってしまいます。ペットに関しても、生きているように見えても人工物で、そのペットの人工物が自分を認識し、相手を認識できるようなものだった場合、それによってもたらされる自分のアイデンティティ感というのはリアルなペットと果たして同じなのだろうか？ということ。今後はそのような部分が大きな問題になってくると思います。

ーペットが家族にとって代わることができるというお話でしたが、人が家族に求める関係性とは究極的には何になるのでしょうか。

山田先生：純粋系が自分を排他的に大切に必要だと思ってくれる存在です。近代社会においては神に代わるものになったように思います。職業的に自分の仕事は必要不可欠だと思っている人も結構いると思うのですが、引退してしまったら困ってしまいますよね。やはり家族というものが、自分のアイデンティティを成り立たせてくれる存在なのだ

と思います。ベック氏によれば、純粹系が Skype でつながっている家族で、あなたが必要で大切にしているということと言語で受け取ることが幸せ、そのような存在がいることが幸せだということです。Skype でつながる家族は純粹系の究極の形態ともいえます。

—社会的な変化により、人類は安易な方向に進んでいくように思えます。温もりのあるペットの世話をすることを面倒とせず楽しいと感じるような社会でいることはできないのでしょうか。

山田先生：社会学者としましては今の社会の趨勢を分析するわけですので、人類はそのような方向に向かっているのだということになるのですが、個人としてはリアルではなくなるのは寂しいと思います。実はバーチャルとリアルの最初の議論は古く、レコードができたときです。生演奏をいい音楽だと感じて聴くのと、レコードでいい音楽だと感じて聴くのはどこに違いがあるのだろうか、という哲学の議論が70～80年前に起きました。私の中では、リアルな人間に恋い焦がれるのと、バーチャルな人間に恋い焦がれるのでは質としてどこが違うのかという答えをまだ見つけられていません。